

市国家政治の重要性、ポリス、地域そして時により広い地理的単位の間が多様性があったことをまず確認する。そしてペロポネソス経済は相対的に活発な状況にあったことを強調する。Sに独自の考察、IV Economies and Landscapeにおいて、農村部の調査データは一部地域で町への人口の相対的移動とエリートによる土地所有権の支配の限定的増大を示すことを確認する。そして生産者と交易者はより広い世界に積極的に関与したと指摘する。考古証拠は広範囲な貧困化を証明しない。小さな貨幣単位の使用は迅速な地方市場取引と両立・促進した。また、ペロ

ポネソス経済は著しく低下したという旧来の観念と矛盾する。最終章では、根本的変化あるいは経済的社会的滅亡よりむしろ連続性と慎ましい改良があったことを指摘する。

このように見てくると、新しい研究動向により、連邦の形成と絶え間ない外部勢力の支配と干渉にもかかわらず、ペロポネソスではポリスの単位が依然として継続し、重要性を有したことが確認される。ポリス内ではエリートと一般民衆の経済的・政治的格差が拡大していったが、後者がポリス内で存在意義を失うことはなかったことが強調される。

## <在外研究記>

### 2022/23年、蠢動

佐藤 昇 (神戸大学)

2022年10月より1年間、私は科研費(国際共同A)を利用して英国ロンドンを拠点に研究に従事した。所属したのはロンドン大学ロイヤルホロウェイ(RHUL)弁論修辞学センター(COR)。L. Rubinstein 教授、C. Kremmydas 教授に受入教員を務めていただき、彼らと共に共同研究を行った。二人とは知り合って10年以上経つが(Rubinstein 教授とは20年近くにもなる)、今回、共同研究を実施するに至ったのは、先行プロジェクトでの共同研究が発端となっている。私は以前より、民会・法廷で用いられる修辞戦略から、民主政を実現・演技するエリートと民衆の関わり合い、古典期アテナイの民主政の実像を浮き彫りにできるのではないかと考えてきた。2017年からは科学研究費プロジェクト「民主政アテナイの演説文化：法廷における実践的修辞戦略に関する総合的研究」を進めており、この間に上述の二人を含む日欧の研究者と共同研究を積み重ね、(疫禍のために計画変更、延期も余儀なくされたが)2021年3月には国際学会《International Conference on Character Portrayal of the Attic Forensic

Speeches》を開催することもできた。今回の渡英目的はこの学会を元にした論集の出版準備を進めること、さらに同プロジェクトの発展を図ることにあった。

当初は2022年4月に渡航する予定であった。半年の延期が疫禍のせいであることは言うまでもない。確かに2022年度初めには新型コロナウイルス感染症の脅威も(人々の意識の中では)薄らいできていたが、未だ勤務先では特例を除き、海外渡航が許される状況にはなかった。そうした中でも10月からの渡航が許可されたのは、疫禍状況の安定に加え、同僚をはじめとする関係諸氏の手厚い支援のおかげであった。とは言え、許可を得た後も渡航準備には思いのほか手間取った。ビザ申請手続きもかつてとは大分異なっており、さらに大阪ビザ申請センターでの手続きから取得までに実に7週間も要することとなった(一時的な渡航者増大の影響であった)。また当初は9月に一時渡英し、居所等の準備を行う心算であったが、水際対策が厳重だった当時のこと、その間に感染すれば1週間は帰国できず、そうなれば本来の滞在計画にも

支障が出かねない。そうした懸念から、以前の滞英時にお世話になった大家さんと連絡を取り、日本国内からメールなどを通じて居所の手配などを進めた。

10月、中東を経由し無事にロンドンに辿り着いた後、通い慣れた古典学研究所(ICS)図書館での研究を開始した。ロンドンは疫禍以前に2度の長期滞在経験があり、その他に幾度も通った場所である。ICS図書館をはじめ近隣の研究機関も使い慣れ、何より友人も多く、安心して研究を始めることができた(参考までに、同図書館に導入された新型ロッカーはやや使い勝手が悪く、当初、何度か図書館員の手を煩わせた。また、新たにセネトハウス地下のカフェテリアが利用できるようになり、かつてのコモンルームには及ばぬものの、居心地の良い場所ができた)。2022年10月当時、英国では疫禍を気にする者などさしておらず、マスクをするのは高齢者、そして東アジアからの留学生、旅行者ばかりであった。このため当初は漫然と、研究者との対面交流も以前と変わらずに行えるものと考えていた。実際、隔週で開催されるICS古代史セミナーも対面(ハイブリッド)で開催されており、私自身は毎週、ほとんど欠かさずに会場に足を運んだ。ところが、知り合いの研究者たちは(忙しいポジションにあるためか)大半がオンラインで参加していた。2022/23年度は「アレクサンドロス受容」「遺物の不正取引」「帝国：古代と現代」「迫害」が共通テーマとされ、興味深い報告も少なくなかったが、オンライン参加者の口は重く、会場の質疑も以前と比べ、心なしかかつての活気を失っているようにも思われた。恒例となっていたセミナー後の会食も、司会と報告者以外にあまり参加する様子もなく、そこに敢えて参加する気にはなれなかった(無論、まだ感染を警戒していたという理由もある)。今後、対面での交流は徐々に回復していくものと思われるが、オンライン化の影響がどれほど後を引くのか、些か気になるところである。

他方、オンライン化が恩恵をもたらす面もさまざまにあった。何より、遠隔地のセミナーに

も気軽に参加できるようになった。無論、オンラインセミナーには日本からの参加も可能であるが、欧米の研究者が主催する会は日本時間の深夜になることが多く、翌日のことを考えれば学期中の参加は難しい。その点、英国滞在中は時差に苦しむことなく、英国はもとより欧米各地で開かれる各種オンラインセミナーに参加し、様々な報告、議論に接することができた(中には《Herodotus Helpline》のように動画を公開しているものもあるので、関心のある方はご覧いただきたい)。興味深いセミナーがいくつも開かれ、取捨選択を迫られるほどであった。しかし、オンラインセミナーはやはり報告後の意見交換が難しい。いずれもそうだが、例えば私自身が報告者として参加した《COR/ISHR Rhetorical Get Togethers 3.0》でも、質疑応答は残念ながら十分と言えるものではなかった(それもあって、自身の報告については個別にRubinstein教授を訪ね、何度か深い議論を重ねた)。

1年の滞在期間中、ロンドン以外の研究者とも交流を深めることができた。一例を挙げれば、まず1月には一時帰国をして、シドニー大学のJ. Kindt教授講演会を開催した(開催には同志社大学の岸本先生、共立女子大学の上野先生にご協力いただいた)。報告、議論も有益であったが、豪州の西洋古典学、古代史学の状況も伺い、今後の交流について議論できたのも大きな成果である。また3月にはポーランドのJ. Filonik博士からの招聘を受け、シレジア大



ヤギェウォ大学(クラクフ)での講演の様子

学(カトヴィツェ)、ヤギェウォ大学(クラクフ)を訪問した。それぞれ古典期アテナイの演説と野次、見物人をめぐる講演を行い、現地の研究者、学生らと意見交換を行った。ポーランドの古典学、古代史研究も活発であるらしく(本人たちはやや暗い将来を語ってはいたが)、同国の研究者とも今後、一層の学术交流を続けたいと考えている。7月にはポルトガルのコインブラで開催された《14th Celtic Conference in Classics》に参加し、Filonik 博士、J. Kucharski 博士(シレジア大学)、B. Griffith-Williams 博士(UCL)が組織するパネル「舞台と演壇」に加わって、アリストファネスに見られる法廷、民会の野次の意味について報告を行った。ここでも同じパネルに参加した英国、米国、ポーランド、イスラエル、イタリアの研究者を中心に、その他、ギリシアや現地ポルトガルを含め、各国の研究者と交流し、意見交換を重ねることができた。イスラエルの研究者にも母国訪問を打診されたが、今はそれが実現できるような環境が再び戻ってくることを願うばかりである。

滞在中は自身も同行した妻も新型コロナウイルス感染症にも罹患した。また各種出版物、翻訳の作業など、プロジェクト外の作業に思いのほか時間を費やさざるを得ないこともあった。その他、必ずしもうまく行くことばかりではなかったが、並行して進めた研究の中から思いがけず手に入れた知見も少なくない。何より Rubinstein 教授をはじめ幾人かの研究者と自身の研究について



コインブラでのパネルメンバーとの会食風景

深く討議する時間も持てたことは、この上なく贅沢であった。冒頭に記した論集をはじめ、滞在中の蓄積を何とか具体的な成果として結実させられるように、そして今回の交流、学恩を日本あるいは東アジアの研究者たちに広く還元できるように、それを受け止めるだけの後進が育てられる環境を作れるように、少しずつでも努力を重ねて行きたい。

## <在外研究記>

### エクセター大学での在外研究を終えて

小山田 真帆(京都大学大学院文学研究科 博士後期課程)

2023年4月から9月までの約6ヶ月、英国のエクセター大学で在外研究に従事する機会に恵まれた。日本学術振興会の若手研究者海外挑戦プログラム(以下、若手海外)に採用されたうえでの滞在だったため、同プログラムへの応募・

採用の過程も交えながら、エクセター大学への在外研究申請スケジュールや現地滞在中の様子を記録したいと思う。若手海外への応募や同大学での研究を志す人の一助になれば幸いである。